

通奏低音

帝国暦四八八年九月初。リップシュタット戦役末期のガイエスブルグ要塞。ガイエスブルグ要塞の最後の防衛ラインもすでに破られ、要塞に参集した門閥貴族の領地のほとんどがキルヒアイス上級大将の部隊の支配下に陥っている。貴族連合軍の副盟主たるリッテンハイム侯爵とその一族が占有していた一画もまた、今は人影すらまばらな廃墟の面影を深くしている。これに先立つ七月、リッテンハイム侯爵はキフォイザー星域での一戦でキルヒアイス上級大将に敗れ、自らもガルミッシュ要塞で部下によって殺害されたと伝えられたのだ。

見詰めていた端末から視線を離し、マクシミリアン・ホフマンはゆつくりと椅子を回した。ほんの半年前まで、リッテンハイム侯爵家の家宰として彼が為すべき仕事のリストで埋まっていた端末の画面は空白に近かった。リッテンハイム侯家は潰え、その領地はキルヒアイス軍の蹂躪するところとなり、資産はフェザンによって凍結された。

ヴェスターラントに対する無差別熱核攻撃。『火の一三日間』以来、人類にとって絶対のタブーとされてきた蛮行を敢えてしたブラウンシュヴァイク公に対し、それまで中立の立場をとり続けてきたフェザンは、一転して貴族連合軍を公然と非難し始めた。その結果として、貴族連合軍がフェザンに保有する一切の資産凍結を通告してきたのである。

門閥貴族中、有能さではブラウンシュヴァイク公家のアン斯巴ッハと並び称されたホフマンである。この通告の意味するところは明白だった。軍資金の途絶は戦闘資材の枯渇を意味し、ガイエスブルグ要塞に立てこもる貴族連合軍の最終的な窮死を意味する。

「……で、どうなさるおつもりなのですか？」

ホフマンの声量は、独り言と言うには豊かに過ぎた。

執務室のドアが開き、帝国軍准将の軍服を身につけた中年の男性が姿を現す。

「お逃げにはならないのですか」

相手の出現を予期していたらしい。ホフマンの表情に驚きはなかった。

「逃げるとは？」

アン斯巴ッハの表情は動きに乏しい。微かに訝しむ色を湛えた目が細められ、正面からホフマンの面を射る。ホフマンは薄く笑った。

「卿ほどの力量があれば、フェザンの商人にたち混じっても十分に勝利者と呼ばれるだけのことはできるでしょう」

「では、卿こそ、なぜここににいるのか伺おうか。既に卿の仕えるべき侯家は潰えた。卿の身を束縛すべきなものも、ここにはないはずだが？」

「ブラウンシュヴァイク公家も、間もなく潰えましょう。時間が前後するだけのことだ」

「……しかし、なお公爵はご健在である以上、私が恣意のままにこの地を出ることはできない。いや、公爵が亡くなり、公家が滅んだとしても、私には為すべきことがある」

「同じ言葉をお返ししましょう、准将。それが、私がここにいる理由でもあります——お疲れでしょう。お入りになりませんか？」

アン斯巴ツハを招き入れ、ホフマンはいずこから取り出したワインのボトルを器用な手つきで開けると、これも魔法のように卓上に現れたグラスに注ぎかける。芳潤なワインの香りが、殺風景な室内の空気を染め、アン斯巴ツハも沈黙な表情をわずかに緩めた。

「四一三年もの……ですな？」

「四一〇年ものには及びませんが、なかなかのものでしょう」

ガイエスブルグを出るに当たって、リッテンハイム侯爵はワイン・コレクションまで携えていった。キルヒアイス軍に負けることなど露ほども考えていなかったに違いなく、歴代の侯爵家が蓄えてきた膨大なビンテージ・ワインのコレクションは、ガルミツシュで灰になったか、あるいはキルヒアイス軍の接收するところとなったに違いない。

「それでも全てはお持ちになれませんでしたからね。まだ数百程度は残っています。いずれ、ローエングラム侯爵の手に落ちることになるとは思いますが」

「処分はなさるぬのか？」

「ワインに罪はありませんから。処分などせず、毒を混じるなど姑息なこともせず、そっくりローエングラム侯に贈呈するつもりです」

しれっとした口調で言い放ち、ホフマンはグラスを傾ける。しばらくその様子を見守っていたアン斯巴ツハも僅かに遅れてホフマンに倣った。

「さて、准将。お話を伺いましょう」

グラスを置き、ホフマンが口調を転じた。

何の話か——アン斯巴ツハがそう感じることはなかった。

「この戦いが始まってからある人物に、こう聞かれました。もし、ガイエスブルグが孤立し、我が公家が敗滅の淵に立たされた時、私はどうするつもりなのか……と。その時、私は答えた。その時は私のブラウンシュヴァイク公家に対する忠誠心が武器となる」と

「——その時が来た、とおっしゃるわけだ」

「左様。その時が。おそらくは数日の内に」

「身を挺して、ローエングラム侯爵に復仇しようとなさるのですね」

幾らも中身を減らしていないグラスに、ホフマンはワインを注ぎ足した。

「私にも、私のリッテンハイム侯家に対する忠誠心があり、それが私がここに留まり続けている理由だ。そう申し上げるだけで、先ほどの質問への回答となります」

アン斯巴ツハに質問を投げかけたのと同じ人物から、ホフマンもまた託されたことがあった。自分がローエングラム侯との戦いで斃れたと聞いたなら、開封してもらいたいとして残された暗号書類のパスワードは、インゼルインフル・シュ・星域で戦われた一戦の後、ホフマンの手元へ届いた。要塞動力炉に仕掛けられた極低周波爆弾の存在と、その開錠コード。彼の人物が、万に一つ、万々に一つ、戦場でローエングラム侯を倒し、帝都を奪回して帝国の主導権の奪回に成功した時、ガイエスブルグ要塞そのものを爆破するつもりだったことを知り、ホフマンは戦慄した。

要塞を爆破し、そこに参集した門閥貴族を戮殺する。ローエン

グラム侯を戦場に倒すと同時に、『ゴルデンバウム王朝を支えてきたとされる貴族を全滅させ、おそらくは『立憲君主制』なる政治制度に基づいた新たな銀河帝国を樹立する。それが彼の人物の真意に違いなかった。

ホフマンに依頼されたのは、彼がローエングラム侯に敗れ、戦場に斃れたあとの極低周波爆弾の扱いだった。

『ローエングラム侯の要塞占拠のタイミングで爆破し、ローエングラム侯とその部下を一挙に屠り去るもよし。侯爵との取り引きに使うもよし。あるいは卿の手で解体して、ことを闇から闇へ葬り去るもよし。すべては卿の判断に委ねる』

この人物が、メルカッツ提督と共に貴族連合軍を統べていればあるいは今日のこの窮地はなかったかも知れない。無論、勝利を得たとしても、彼の仕えるべき貴族家のほとんどが同じ人物によって殺戮されてしまったらうにしても、ローエングラム侯の前に一方的に蹴散らされ、傲慢で愚昧な敗者としての立場のみ、史上に遺される無様さからだけは救われたかも知れない。

「卿は卿の立場に従われるがよろう……ただ、私にはやっておきたいことがもう一つある」

我が手がローエングラム侯に及び得なかった時、たった一滴で良い。ローエングラム侯の部下の誰でも良い、彼に対する不信の毒をたらし込める仕掛けをしておきたい」

「ローエングラム侯の部下に、彼らの主君への不信ですか？」

そんなことが可能なのか……言い差したホフマンの言葉が詰まった。要塞動力炉に仕掛けられた極低周波爆弾。それを仕掛けた男は、なぜ、彼が勝利した後、門閥貴族の殲滅を企てていたのか。

ローエングラム侯を戦場で葬れるのであれば、彼自身が玉座に就き、門閥貴族を拝跪させて、『ゴルデンバウム王朝による専制システム』の復旧を企図する方が自然ではなかったのか。彼は、なぜその道を選ぼうとしなかったのか。

「――准将」

咽喉にからまるいがらっぽいものを振り捨てるように、ホフマンの声が掠れた。

「私に考えがある。聞いていただけようか？」

「卿の考えというのは、来るべきローエングラム王朝が、いずれゴルデンバウムと同じ道を行く。その可能性を、ローエングラム侯の部下の誰かに気づかせると言つことと察するが？」

「どうして、それを――？」

僅かでも歴史を知る人間なら、誰でもが思いつくことだ――アンスバッハの口許が笑いとも言えない動きに震えた。

「共和主義者どもは大帝陛下を史上最悪の篡奪者などと非難する。先行する政体を篡奪せずに成立した政体など存在しない。では篡奪は常に悪か？ 篡奪される側が常に善か？ 大帝陛下が篡奪なさったという銀河連邦とやらが、それほどに優れた政治制度だったのか？」

当時、銀河連邦がすでに『中世的停滞』に陥り、社会は閉塞感に包まれ、人々は先行きの不安を日々の享楽で紛らわせる状態にあったことは、さすがに自由惑星同盟を称する共和主義者どもの主魁ですら認めている。当時の銀河連邦が社会を覆った弊風を払う上で有効に機能していなかったことも、歴史上の事実と言って良い。既成組織間の調整と利益の分配のみに終始していた銀河連邦が、政

府に対する一般民衆の不満と絶望を呼び、結果的にルドルフ・フォン・ゴールデンバウムの出現につながった。これもまた否定できない事実と言っしかない。

「——つまり、今の帝国は、当時の銀河連邦と同じ状態にある……と」

「異論がありが、ヘル・ホフマン?」

「いいえ——ローエングラム侯の一派を結集させているのが、帝国なんかなくゴールデンバウム王朝への反発である以上、彼らの往く道もまたゴールデンバウム王朝なのだと、あるいはその可能性がある」と認めれば……」

「……あるいはローエングラム侯への不信の芽につながる種くらは時くことができるかも知れない。いずれにしても、卿も私の考えに賛同してくれるのであれば、その可能性もそれなりにあり得る」と考えても、誤りではないということだろう」

同意を示してホフマンは頷く。ローエングラム陣営についた何人かの高級士官の顔が脳裏を流れた。自らの覇気を抑えかねつつも帝国という枠組みそのものの破壊にまでほんの半歩を踏み出し得なかつたり、単に現状の帝国軍の弛緩した指揮統制に飽き足らなかつたり、あるいはまた、今次の動乱を自身にさらに上の階梯を目指すための機会にしか思っっていなかつたり……と。アンスパッハが蔭こうとする毒の種子を胸裡に発芽させる余地を持った人物は枚挙に暇あるまい。

考え、ホフマンはふとある思いに首を振った。旧政権を篡奪して生まれる政体が必ず通過せねばならない『創業の暗黒』の中、彼らはローエングラム王朝に叛し、あるいは倒され、あるいは新王朝

に致命的な傷を刻み込むかも知れない。だが、それは歴史の必然と言っべきであり、金髪の覇者への不信が彼らを叛者への道へ辿らせるのではあるまい。

あなたの亡霊を作ることしよう——ホフマンの提案はさすがにアンスパッハを驚かせた。

「亡霊など作ってどうすると? ローエングラム侯の部下たちがそんなものを信じるはずはあるまい」

「狙うのはローエングラム侯の幕僚達ではない。兵士達です」

戦場が宇宙に移ったとしても、軍隊の最下層をなす下士官や兵士ら、宇宙での戦闘であるがゆえに、彼らの生死は大きすぎるほど大きく運に依存する。そして、それを知っているのが他ならぬ下士官や兵士たちなのだ。

「彼らは不吉を嫌い、不運を暗示するものを忌避します。ローエングラム侯を狙い、非命に斃れた卿の亡霊ほど、不吉であり、かつ不運を象徴するものはない。違いますか?」

「それは……その通りだ。しかし、末端の下士官兵が数百や数千、私の亡霊を恐れたところで何が起るといふものでもあるまい」

「……そうした将兵の不安が広がったとして、それがローエングラム侯への悪影響を案じる人間が侯の側近に居たとします。それが、卿が『ローエングラム侯への不信の種子』を与えるべき人物でしよう。この人物は、ローエングラム侯のためを思って行動を起こすのですから、侯にとっては近い人物であり、信頼すべき腹心である筈です。そうした人間が、わずかも侯の将来を不安する心理を抱くようになれば、これは、卿にとって最も思わしい結果とはなりま

せんか？」

即答はない。アンスバッハは憔悴のひどい横顔をホフマンに向けたまま、ワイングラスの中の紅い細波を見詰めていた。オフレッサー上級大将の死の後、愚にも付かない讒言を真に受けたブラウンシュヴァイク公は、リップシュタット戦役の最も重要な期間、彼に最も忠実な部下を拘禁させる致命的な失策を犯した。その一点だけでも、ブラウンシュヴァイク公が貴族連合軍二六〇〇万の頂点に立つべき人物ではなかったことは明白だ——ホフマンの思いは確信に近い。

アンスバッハの部下たちに、拘禁場所を知らせ、身柄を解放させたのもホフマンに他ならなかった。すでにガイエスブルグ内部の統制はあつてないようなもの。アンスバッハを解放できる機会は今しかなかったし、彼の存在を欠いては、ブラウンシュヴァイク公の最後は余りにも見苦しいものとなりかねない。

「宜しい。卿の提案を採ろう。卿にはすでに目標とすべき人物にも心当たりがあると理解して宜しいな？」

「ええ」

頷き、ホフマンはその名を告げる。ローエングラム侯の腹心たる赤毛の驍将ジークフリード・キルヒアイス。ゆえに、アンスバッハの亡霊のためには、キルヒアイスを相手に語るべき言葉を用意しなければならぬ。万一、キルヒアイス以外の人物が訪れてきたとしても、もともと絶対的な効果など狙うべくもない、子供だましにも似た策略に過ぎないのだ。

「できるなら、生前に面を合わせて話をしてみたかった人物でもあります。これは仕方がありませんまい」

『亡霊』の準備には困難さは何もなかった。アンスバッハのホログラム映像を用意し、自動音声応答システムを利用して、問答を誘導する。難があるとすれば、時間が不足していることだった。彼らが『亡霊』を作り上げている内に、貴族連合軍の最後の反撃はキルヒアイス以下のローエングラム侯軍に粉碎され、メルカッツ上級大将の旗艦もまた遂に帰らなかった。

要塞宇宙港の防衛網が破られ、ローエングラム侯軍の機動歩兵群が鋼鉄の濁流となつて要塞内へ流れ込み始める直前、ようやく『亡霊』は完成し、アンスバッハとホフマンは別離の杯を交わした。「この次、お目にかかる時はヴァルハラで、ということになりましたよ」

「ローエングラム侯の首を土産にできれば、これに越したことはないが……運のあることを祈っていただけとありがたい」

もはや、それ以上の言葉はなかった。

アンスバッハが主君の遺体を隠れ蓑にローエングラム侯ラインハルトの暗殺行へ赴く一方で、ホフマンは自ら進んでラインハルト軍に投降する。ホフマンがもたらした『要塞動力炉に自爆装置有り』の情報、ローエングラム軍が対応に人手を割かれた結果として戦勝祝賀会場への警備を極度に希薄な状態に陥れる結果を生む。ジークフリード・キルヒアイスの献身がなければ、アンスバッハはローエングラム侯の首を土産にヴァルハラでホフマンと再開する幸運を得られたかも知れなかった。

以来、約一年余り。その間、アンスパツハの『亡霊』は、一度はうち捨てられたかに見えた、かつての貴族連合軍の本拠地の片隅で、ひっそりと息を凝らしていたのである。ガイエスブルグが恒星系間航行能力を与えられ、帝国軍の機動戦力の一画に復帰し、ジークフリード・キルヒアイスがアンスパツハの凶手から受けた傷を癒し、ガイエスブルグへ戻ってくるまでは。

要塞のワープ航行の実証実験が行われた時点で、すでに要塞内には『亡霊』の噂が充滿していた。アンスパツハ、あるいはホフマンの『怨念』あるいは『呪詛』を語る声が蔓延する様は、人間が、いまだに類人猿から受け継いだ、目に見えぬ尻尾を尾てい骨の先に遺していることを証するかのようにだった。

こうした噂が下級将兵の間にはびこり、囁かれているだけならキルヒアイスも自ら動くことは考えなかったに違いない。しかし、奇禍が起きた。時を同じくしてラインハルトが高熱を発して倒れたのだ。一度ならず二度までも、『亡霊』とラインハルトの健康とがあらぬ結びつけ方をされる危険さを、キルヒアイスが案じざるを得なくなつたのも当然のことだった。

調査を進めさせたキルヒアイスは、一日、要塞の深部、かつてのホフマンの執務室を訪れ、そこでアンスパツハの『亡霊』と対面することになった。

『ローエングラム公の治世のことだ』

『亡霊』は彼に問うたのだ。ラインハルトが帝国を覇し、やがて自由惑星同盟を降して、全人類の皇帝となり果せた、その後はどうするのか——と。

キルヒアイスにとって、この問いは意外に過ぎた。ラインハル

トが登極し、過去一五〇年に渡って銀河を覆っていた戦火が熄む。その後——つまり、ラインハルトと彼キルヒアイスが手を携えて宇宙を望んだ、その誓いが果たされるということだ。キルヒアイスは帝都に戻り、そうして今度こそ胸を張ってアンネローゼを迎えに行く。

アンネローゼは彼らに言ったのだ。『わたしが、あなた達の将来の邪魔にならなくなったら、その時には迎えに来て——』と。その時が来るのだ。三人の、あの黄金の時を取り戻す、その新たな日々がやってくる。

だが——

『四〇〇億の人間をたった一人で統治する。それが皇帝だ。翻つてたといかなる人間であろうとも一日は二四時間の時間しか持たない。これがいかに過酷な労働なのか、卿には想像ができるか？』

ローエングラム公はゴールデンバウムの大半の皇帝陛下よりも有能で勤勉だ。しかし、この先、何十年も有能で勤勉であり続け、帝国の統治のみに自らを献身させ、かつ卿との友情や姉との生活を保ち続けることなどが人として可能なことなのかどうか、卿は考えてみたことがあるか。人は疲れるのだ。大帝陛下とて、人としての疲れの挙げ句にその後半生を終えられたと、卿は考えてみたことはないのか。ローエングラム公が、同じように人としての疲れと迷いの中で、大帝陛下と道を同じくするかも知れないと、その可能性を思ったことがないと、卿は心から誓えるか？』

『亡霊』の言葉に、キルヒアイスがまったく動揺しなかった……と言えは嘘になるだろう。ラインハルトがいかに天才と呼ぶに値する人間であろうとも、やはり人間としての限界は持っている。四〇

○億を超える人類社会すべてをただ一人の専制君主として統治していく事業に、最初の内はともかく数十年を経て、なおその精神が停滞や腐朽、疲労から自由であることが、人として可能なのだろうか。その時、自分は、統治に疲れ、倦んだ専制君主の側近であり続け、アンネローゼはその姉……市井の一女性ではなく、皇姉と呼ばれる存在として帝国の統治の一端に携わる立場にあらねばならないのか。

ラインハルトの病臥という事実さえなければ、キルヒアイスもこれほどの動揺を内心に抱くことはなかっただろう。

キルヒアイスの不安を煽るのは、以来、ラインハルトの発熱がその一度にとどまらなかったことだった。倒れるほどの高熱と言ったことはなかったが、どうかすると白大理石のような白晢の頬に薄く透かしたような血の色が鮮やかに浮かび上がっていて、蒼氷色の双眸もいつもの鋭さを失って、どことなく曖昧にぼんやりして見える瞬間がある。

「どうなさったのですか、ラインハルトさま？」

二人だけの時にのみ、キルヒアイスが自分に許している呼び方で呼びかけるのに、ラインハルトは微かに眉を顰めて苦笑するのだ。「キルヒアイスは心配性だな。ちょっと熱があるみたいだが、別に疲れてもいないし、気分が悪いということもない。今日は早めに切り上げて眠れば、明日にはすっきりしているぞ」

その『早め』というのがしばしば深夜に及ぶのだが、それでも翌朝には拭ったように熱の色を追いついてしまっているラインハルトの姿に、密かな安堵の息をつく回数が次第に増えているのは錯覚なのかどうか。

帝都の元帥府で始めてラインハルトが高熱を発した時、たまたま元帥府に詰めていたという理由だけでいつの間にかラインハルトの主治医のような立場を与えられているのが、F・J・パウアーシュミット医師である。そのパウアーシュミット医師が、ラインハルトの発熱に、まだ正体の解明されていない疾病が関係している可能性を示唆したのが帝国暦四八八年末、帝国軍によるフェザーン侵攻作戦『恐るべき冬』発起を決める作戦会議直前のことだった。

余りにも症例が少なく、公的な研究予算の支出を認められないことから、研究そのものが成り立たないと訴えるパウアーシュミット医師に、キルヒアイスは元帥府副司令官としての機密費の流用を決めかけたのだが――

「その件は父と相談させてください」

フリードリッヒ伯爵令嬢ヒルデガルト……ヒルダは、一言でキルヒアイスの内心を言い当て、かつ機密費流用の危険さを指摘してのけた。パウアーシュミット医師は未確認の疾病とラインハルトの病臥の間に『行きずりに買った宝くじが二等賞に当たる程度の確率』での関係性を指摘しているに過ぎない。公的な研究機関がパウアーシュミットの研究に価値を認めていない以上、キルヒアイスが元帥府の機密費でそれを支援するのは、『公費の私的流用』として非難を受けるに値する。

「ローエングラム公の御為、ひいては帝国の将来のためです」

ヒルダはそう言いきって、フリードリッヒ伯爵家の資産によるパウアーシュミット医師の支援を約束したのだ。

公式にはラインハルトの命によって幽閉の身となっているアンネローゼを、ヒルダが再び訪れたのは、このすぐ後のことである。アンネローゼが隠棲の身を移したのは、フロイデン山地の中にある山荘である。厳寒期には完全に雪に閉ざされる一帯であり、山荘もまたそうした季節でも正常な生活を送れるだけの準備が整えられていたが、それでもアンネローゼの身の回りにはコンラート・フォン・モーデル少年の他は、ほんの僅かの使用人が交替で詰めているだけだった。かつ、フロイデン山地の厳寒期を何年も、山荘のある高度帯で起居を続ける例は、皆無ではないにしても稀少というべきであつたし、アンネローゼのような女性については他に類例のないことだった。

ラインハルトが、敢えて命令を発してヒルダをフロイデンへ出向かせたのも、厳寒期のフロイデン山中で、万一にも不慮の事故が姉の身を襲う可能性を案じたからに他ならない。

もちろん、自ら発した命令をほんの数ヶ月で平然と翻せるほどにラインハルトは自省を欠く人間ではなく、最も寒気と積雪の厳しい時期だけでも、彼女に山中から移動するよう、改めて『命じる』ようラインハルトに助言したのはキルヒアイスだった。

「俺が姉上に命じるのか……？」

躊躇いを見せるラインハルトに、キルヒアイスはさらにヒルダを介して『命令』を伝えてもらうように進言したのだ。

「……つまり、そういうことなのだ。できれば私自身か、キルヒアイスが出向いて姉上にその旨を伝えたいのだが、姉上をフロイデンに移したのは……つまり、わたし自身だ」

ヒルダに依頼の言葉を告げる時のラインハルトの表情は、いつ

になく気弱とさえ言えるほどであつて、ヒルダを驚かせるに十分だった。

「姉上をフロイデンまで送ってくれたあなたなら、姉上も話を聞いてくださるだろう。些か、時期としては遅すぎる気もするが……」

この時期、帝都もまたフロイデン山地の方面から押し寄せてくる灰色の雪雲に覆われる日が多くなつてきている。帝都からでも地平線の遙か彼方に望むことのできるフロイデンの主峰群はすでに白銀色の雪化粧を終えており、アンネローゼの山荘一帯も厚い降雪に見舞われていることも、ラインハルトの許へ報告されている。「分かりました。グリューネワルト伯爵領の中で、フロイデン山麓の別邸へ移っていただくのですね？」

「そうだ。それであれば、わたしの命に正面から違背したことにはならない……と思う」

「ですが、万一にもアンネローゼさまが、移る必要はない。このまま山荘に留まるとおっしゃった場合はいかがいたしましょうか？」

ヒルダは、一見この上なく嫺やかで、風にも耐えぬかに見えるアンネローゼの、一方で極めて執拗な芯の通つて見える繊細な容貌を思い浮かべている。彼女が一度心を決めたことを、強制であること、あるいは説得であろうと変えさせるのは容易なことではないのではないか。それがヒルダの直感だった。

「その時は……」

一瞬、苦痛に耐える表情になつたラインハルトは、しかし、顔を上げた時は帝国を治める独裁者の表情に戻っていた。

「その時はやむを得ない。姉上の意思に任せよう。だが、あの山荘

での真冬はわたしも経験しているが、一年だけならともかく、この先何年かを姉上一人で過ごすには余りにも厳しいと思うのだから、敢えてあなたに行ってもらいたいのだ。あなたの言葉であれば、姉上も耳を傾けてくださるだろう」

「その点は何とも請け合いかねますわ、閣下」

さすがに苦笑を浮かべずに対応はできなかった。アンネローゼが、ラインハルトやキルヒアイスの説得でも受け入れないとすれば、それがヒルダを介して伝えられたとしても、彼女が首を縦に振るとは思われない。

「ご命令は承りました、閣下。フロイデンに向き、アンネローゼさまにお会いして参ります。閣下からのご命令として、山麓の別邸へお移りいただくよう、申し上げて参ります」

「その——感謝する、フロイライン」

帝都からアンネローゼの山荘までは、例によって地上車で約六時間の旅程である。この時期、『^{フリンブル・ペー}恐るべき冬』作戦発起を控え、ヒルダもまた幕僚総監代理として帝国軍最高司令官の帷幄^{えいご}に侍する正規の職務を得ており、身辺は多忙を極めていた。可能であれば、時間の節約のために航空機を利用したいところだったが、さすがに建前上、ゴールデンバウム王朝の統治下にある帝国首都である。その始祖の勅令を正面から無視することはかなわなかったし、ラインハルトもまた、フロイデン山地とその山麓地帯への保護に関してだけは、ルドルフの正の遺産として継承する意思を明らかにしている。とは言え、六時間近い旅程の間、ヒルダは地上車の座席で無聊のままに時を費やす贅沢を自らに許すことはできなかった。車内に

持ち込んだ携帯端末機と、多量の書類を相手に大半の時間を過ごし、漸くそれらが一段落を見た時には既に、道路の左右には、路上から除雪され積み上げられ、固く圧縮された白い壁が見上げるほどの高さに聳え立っていたのだ。

山荘を中心とするグリーネワルト伯爵領の境界には警備所が設けられ、常時一個中隊を超える装甲擲弾兵部隊と、山岳装甲兵・機動歩兵の混成部隊が交替で警備についている。彼らは、単にこの警備所だけを固めているのではなく、山荘に通じる一切のルートを空と陸、さらには衛星軌道上から監視して、無許可でアンネローゼに接触しようとする試みに目を光らせているのだ。

ヒルダの、帝国宰相首席秘書官・兼・幕僚総監代理の肩書きを持つてしても、この警備所の通過は許されなかった。ラインハルト自身が、彼女にその許可を与えていないのだ。ヒルダが許されたのは、山荘への直通^{ホットライン}回線を経由した、スクリーン越しの面会だけだった。

「このホットラインを使うのは、これが初めてです。伯爵夫人からは、定期的にこの連絡を頂いておりますし、畏れながら監視カメラ越しにご無事なお姿も確認をしております。ご健康面でも問題ない旨も確認ができております」

当直の少佐肩章は、通話室にヒルダを案内しながら、生真面目な口調で説明した。

「伯爵夫人からのご連絡は、映話ですか？」

「映話とメール、音声通話の三種でのご連絡を頂いております」

ただし、すべての会話、映像、メールが記録され、万一にも外部からのコンタクトを求めるような内容があれば、直ちに警備本部

に通報されるのだという。

「ただ、このホットラインだけは例外です。会話も映像も一切記録されません。ですから、お使いいただけるのは、ローエングラム三元帥閣下ご自身の許可を得られた方で、かつ元帥ご自身とキルヒアイス提督以外の方に限られます」

「ローエングラム元帥とキルヒアイス提督も？」

「ええ、それが元帥からの直々の命令です」

少佐の言葉に、ヒルダは理解した。ラインハルトは、そしておそらくキルヒアイスも、彼ら自身が禁を破ってアンネローゼに接触してしまう可能性を恐れたのだろう。ラインハルトはそれが姉の意思であると知つての上で、そしてキルヒアイスはアンネローゼの想いを察して、このような措置を執つたに違いない。

「無監視でお話いただけるのは最大三〇分です。それを超えますと、以降の通話は記録されることになっております」

「わかりました、少佐。ありがとうございます」

どうしたしまして……鮮やかな敬礼を残して、少佐が踵を返すのを見送り、ヒルダは通話室に入った。

「アンネローゼさま……」

すでにスクリーンにはアンネローゼの姿があった。山荘のサロンの……ヒルダも訪れた、あの居心地の良い部屋。白く染まった窓外を背景に、斜め後ろの暖炉もオレンジ色の炎を上げていた。

『ヒルダさん、お久しぶりです』

アンネローゼの印象は全く変わっていない。一〇月に山荘に入つて、二ヶ月余り。山荘はすでに雪と氷に閉ざされているはずだが、人為と自然の双方の手で為された幽閉の中にある人とは思われ

ず、その微笑は自然さを極めていたし、顔色はやや透き通つて白く見えたが決して不健康な青白さはなく、表情は晴れやかだった。

「アンネローゼさま、きょうはローエングラム公の命令をお伝えに上がりました」

『ラインハルトが？ 命令を？』

山中の山荘から、山麓の別邸へ移ること。これは幽閉の解除ではなく、アンネローゼの健康と安全を案じたものであり、幽閉措置は今後も継続するものである。

ヒルダの言葉に、アンネローゼは小さく首を傾げながら耳を傾けていたが、ヒルダが口を閉ざすと、その黄金色の髪は否定を示して緩やかに左右に動いた。

『わたしは、ここで不自由をしていませんわ、ヒルダさん。外は雪の中ですけど、この山荘は二人や三人で掃除するには広すぎますし、身の回りを色々と片付けているだけでも、あつという間に時間が過ぎていきます。無聊に苦しむこともないし、身体を動かすことに欠けるようなこともない。それに、こここの冬にはある程度慣れています。無理をして危険な目に遭つようなことをするほど、わたしも子供ではありません』

「ですが、その山荘では余りにも山中過ぎます。山麓に移られても日々のご生活は幾らも変わらないと思いますわ。これは、命令と言っていますけれど、ローエングラム公が姉上を案じておられるが故の、姉上へのお願いだ」と理解いただけませんか」

『それは……分かります』

「それにキルヒアイス提督も、アンネローゼさまの身が少しでも安全な場所にある方が安んじてローエングラム公の覇業に行を共に

することが叶うのではないでしょうか」

『キルヒアイス……提督が』

もう一度、今度は眉の間に軽く皺を寄せるようにして、アンネローゼは左右に首を振った。

『ヒルダさん、あなたには分かっていただけだと思います。わたしは……わたしの意思でここに居るのです。ラインハルトと、ジーク……いえ、キルヒアイス提督の回りから、少しでもわたしの影が薄くなるためには、わたしはここにいた方が良いでしょう』

やはり……とヒルダは思いつ。自らを極度に非政治化することで彼女の被保護者を逆を守る。それが後宮時代からのアンネローゼの処世術であり、自身、何の力も政治的影響力も持たない彼女にとつて、自らの存在を希薄に、姿を透明にしようとするのが最大の武器だった。そして、これまで彼女のそのやり方は正しく報われてきたのだし、恐らくは今後もそうだろう。

ラインハルトが姉を無期限に『幽閉』したことで、人々はアンネローゼの存在とラインハルトへの影響力を忘れ始めている。ただまだ二ヶ月。人々の記憶から、先帝フリードリヒ四世の寵姫アンネローゼの記憶が完全に薄らぐにはまだ何年かを要するに違いない。アンネローゼが案じるのは、今、彼女が居所^{きょしょ}を不用意に動かすことで、折角薄らいだ彼女の存在感が、再び人々の記憶の中での色彩を蘇らせてしまうことなのだ。

何度が言葉を換えて説得を試み、柔らかな受け答えの内にもアンネローゼが応諾の意思を示さない間に、三〇分という時間はあっという間に経過しようとしていた。

「わかりました」

残り時間が五分を切ったのを確認し、ヒルダはアンネローゼの意思への尊重を示して頷いた。こうなるであろうことは、彼女の予測の内にあったし、おそらくはラインハルトもキルヒアイスも、アンネローゼから諸の一言を引き出せなかったとしてヒルダを難じることもないはずだ。無論、彼らから責難されることをヒルダは恐れていなかったし、また彼らがそうして彼女を責めるはずもないことを知っている。

「アンネローゼさま、あと一つだけ、お願いがあります」

『なんでしょう？』

「先ほど、アンネローゼさまは定期的に健康状態を報告しておられると聞きました」

『ええ……ここに機械がありますから』

ヒルダ自身が設置と作動までを確認した、自動診断装置が山荘には据えられている。装置の仕様や使い方もヒルダの知識の内にあった。

「時間がありませんから、極く簡単におはなします」

バウアーシュミット医師の研究する未知の疾病。極めて低い確率……通りすがりに買った宝くじがたまただ一等賞を引き当てる程度の……だが、ラインハルトがその病の前駆症状をしめしているのではないか。だが、余りにも症例が少なく、研究費用もないために、バウアーシュミット医師の研究は全く進歩を見せていない。

「費用に関しては、マリィンドルフ伯爵家から研究への投資として支出します。あとは可能性の枝切りが必要だと医師^{ドクター}は言っています」

『……わたしにその医師の診断をつけなさいとおっしゃるの?』
それは無理だ——アンネローゼの表情にはつきりとした拒否の色が浮かぶ。住まいを変えることすら憚るうとしていたのだ。ラインハルトが未知の疾病に冒されているかも知れず、その可能性を否定するにしても肯定するにしても、とにかくアンネローゼがその医師の診断を受ける。そんなことができようはずもない。

「ええ、分かっています。ですから、お願いは、その定期的な健康チェックです」

『え——?』

不得要領なアンネローゼに、ヒルダはさらに口早に説明する。バウアーシュミット医師に直接確認した事項だった。アンネローゼが自動診断装置を使って確認している自らの健康状態。その確認項目の幾つかを増やして欲しいのだ。完全ではないが、バウアーシュミットが対象とする疾病の遺伝的な素因をアンネローゼもまた所有しているのか否か、その検証のための手掛かりにはなる。

ヒルダがアンネローゼへの使いを受けた、本当の理由がこれだった。キルヒアイスから相談を受け、何日も考え抜き、バウアーシュミットにも相談した結果、アンネローゼの線から遺伝的要素の可能性を確認する唯一の方法がこれしかない、と結論したのだ。

自動診断装置からの情報は、この警備所を経由し、帝都の元帥府へ送られる。アンネローゼの健康状態に関する情報だけに厳重な管理はされているが、最高度の軍事機密というわけではなく、ヒルダの与えられている権限を持ってすれば情報を持ち出すのは難しくない。確かに危険と言えば危険な橋を渡ることにはなるが、情報

の内容にしても、専門家がそれと分かって判断しなければ、バウアーシュミットの研究対象と結びつけて考えることは不可能だ。

ヒルダが説明を終えた時、すでに残り時間は三〇秒を切っていた。が、アンネローゼの見せたはつきりとしたほほえみが、ヒルダを安堵させた。彼女がヒルダの言葉を充分以上に理解したことを充分以上に示していたからだ。

『分かりました。ヒルダさん、弟とジークのためですから、喜んで』

「ありがとうございます、アンネローゼさま」

「ところで、今度はまるで無邪気な少女のように笑い、アンネローゼはこくと顎を引いて見せ、そして言った。

『ヒルダさん、本当に、ラインハルトのことをお願いします』

「文理大学医学部に、未踏査研究分野の研究費のオファーを出せというのだね?」

マリンドルフ伯フランツは、いつに変わらぬ柔らかな表情のまま、ヒルダの持参した書類に視線を落とした。すでに國務尚書就任への内示を承諾し、帝國政府の文官を統括する地位に就いて以来、娘といえども彼との面会時間を確保するのは中々に困難だった。無論、ヒルダ自身が帝國宰相たるラインハルトの首席補佐官であり、帝國軍においては幕僚總監代理の立場にある。多忙さでは國務尚書と変わるところはないし、あるいは輪をかけての激務とも言える。

「ええ、そうですね、お父様」

「分かっていると思うが、伯爵家の公の投資となると秘密にはでき

ない。そのことは承知なのかね」

他の多くの貴族同様、マリンドルフ伯爵家の資産もフェザーンの金融機関を経由して運用されている。大学に対する研究チームの公算をマリンドルフ伯爵家が行うにしても、具体的な運用は彼らの手を経ることになる。そして、伯爵家はリップシュタットの戦いで生き延びた旧大貴族の中でも最も有力な一族と見做されている。この時期に伯爵家が行う新たな事業はフェザーンの好奇の視線を引き寄せるだろう。

「ええ。コラゲネ・クラシク・ハイト 膠 原 病 だけでなく、複数の研究分野に対してのオファーとするのもそのためです」

それゆえに、キルヒアイス提督には元帥府機密費の流用などと言つリスクを冒して欲しくなかったのだ。ヒルダはそう思う。キルヒアイスがバウアーシュミットに資金を与えたことは秘密にできても、医師が研究のために金を遣えば、フェザーンの触覚に触れるのは避けられない。バウアーシュミットの研究は、広範囲にわたる症例調査を含むから、費用もそれに大きい。彼がこれまであまり着手できていなかった研究テーマに大々的に手を広げられるようになれば、その資金源が探られるのは当然のことなのだ。

出資者がローエングラム元帥府と分かれば、キルヒアイス提督の裁量であると推察されようし、そうなれば、ラインハルトの発熱や病臥も、いずれフェザーンの知るところとなるかも知れない。

「ふむ……」

マリンドルフ伯が書類のページを繰るのに、ヒルダは敢えて言葉を挟まない。彼女は父の判断力を信じていたし、父が正しい判断を下せるだけの材料を、その書類が漏れなく含んでいることにも

自信があつた。キルヒアイスとの会見の後、多忙を極める業務の暇を盗んで書類をまとめ上げたのは彼女自身だったのだから。

穏やかな視線が上がり、ヒルダの視界の中でマリンドルフ伯が大きく頷いた。

「一つだけ訊いておくが、これはローエングラム公の御為にするのとだね？」

父が察してくれたことをヒルダは理解した。緊張しているつもりはなかったが、どこかでほつと息をついている自分がいるのも事実だ。

「ええ、そうです。でも、それだけではありません」

つまり、コラゲネ・クラシク・ハイト 膠 原 病 の分野については、バウアーシュミット准教授が研究費を獲得することになる。他はバウアーシュミット准教授に資金を与えることが目立たぬようにするためのカムフラージュに過ぎない。

もっとも、その意味では最も投資回収の見込みの低いのが、バウアーシュミット医師が獲得することになる コラゲネ・クラシク・ハイト 膠 原 病 分野での研究である。ヒルダの案では、マリンドルフ伯爵家が支出することになる研究開発費は、総額で一〇〇〇万帝国マルクにも達する無論、それだけの巨費を、ヒルダは父に無駄に費消させるつもりはないのだ。

ローエングラム公ラインハルトの台頭による帝国内部の改革は、すでに学問分野にも及び始めている。帝立大学や国立オーディン文理大学を初め、帝国の研究機関で主要なポストを占めていた、貴族出身者や有力者のコネを持った人物の一掃が進んでいる。そうした

無能な有力者に圧迫され、研究室の片隅や地方の研究機関に追いやられていた有能な研究者がポストと資金を与えられ、新たな学問の流れを作り始めている。

マリンドルフ伯爵家が研究テーマを募れば、そうした研究者からの応募が得られ、その成果は伯爵家のものとなる。ヒルダは国立オーディン文理大学医学部での研究テーマ群を調査し、その中でこれまで帝国では余り研究の行われてこなかった研究分野と、将来を囑望される新進の研究者のリストアップを行ったのだ。彼らの研究が成果を出し始めれば、今回の投資はむしろ安すぎるものと言えるに違いない。そうなれば、伯爵家として継続的に研究テーマの募集と研究費の交付を続けられれば良いし、最終的には帝国政府に引き継いでも良い。

バウアーシュミット医師の研究が、その意味で最も投資効果に疑問符の付くテーマであることは疑いを容れない。しかし、ラインハルトの病臥に対する万一の保険という意味合いを除いても、バウアーシュミットが帝国の医学界でも屈指の有能な研究者であることに代わりはない。今回の調査を通じて、ヒルダはその事実を確認している。僅かに意外であり、また喜ばしいことだった。

「分かった。この件はマリンドルフ伯爵家の事業として行つよう指示を出そう。急いだ方がよいだろうね」

「できるだけ早く。今年中に、動き始められるようにできると宜しかと思います。何にしても時間のかかる研究が多いですから」

そつだらうね——父が微笑んで頷き、ハンスを呼ぶのにヒルダは改めて頭を下げた。ヒルダが国務省出仕前の父を訪れてから、その承諾を得るまでわずかに一〇数分である。他者から見れば、また

しても彼女があつさりと父を説得したと見えるかも知れない。

そんな簡単なことではない——ヒルダの偽らぬ感想である。

彼女の父マリンドルフ伯爵家は娘で持つてゐる『など』という囁きは父に対する最大の侮辱だ。ヒルダが本心からそう思つてゐるように、マリンドルフ伯は無能な人物ではない。一つを誤ればたちまち陰謀の陥穽の中で失脚を強いられた先帝フリードリヒ四世の治世末期において、有数の大貴族としての地位を全つし続けただけでも、父の有能さ、聡明さを証明するには十分だ。娘としてのひいき目ではなく、ヒルダはそう思つたのだ。

それゆえにこそ、父の説得には骨が折れた……と思う。会つてから、承諾を得るまでの時間とは関係はない。父は彼女が正しいことをしていると判断すれば、無条件に後押ししてくれる。今回も自分分は正しい選択をできたのだらう。

自らも元帥府への出仕のために父に退出を告げたヒルダの、律動的な足取りがふと止まったのは間もなく伯爵邸のエントランスという回廊の途中だった。

「これはローエングラム公の御為にすることだね」

マリンドルフ伯はそう彼女に尋ねたが、あれはどういう意味だったのだらうか——その疑問がにわかに胸の裡に兆してきたのだ。

無論、それは帝国宰相主席補佐官、あるいは帝国軍幕僚総監代理として、宰相であり帝国軍最高司令長官であるローエングラム公のためにすることなのだ……「反射的と言つより、数式を計算するよ」うにヒルダは自問自答する。だが、父は本当にそんな回答を求めて、

あの質問をしたのだろうか——思い、ヒルダは気づく。確かに、職務としてローエングラム公の健康を気遣うのは当然だが、そのために父を動かし、少なからざる費用を投じて、万一の保険としてパウアーシュミット医師の研究を支援させようとする。それは補佐官あるいは幕僚総監代理としての、単純な職務の遂行という範囲に留まるものなのか。あるいは、父はそんな意味を込めて質問したのではないか。

「ヒルダさん、ラインハルトのことをお願いしますね」

この九月、グリューネワルト伯爵夫人アンネローゼをフロイデンの山荘に送った時、そしてつい先日、直通回線での会話の別れ際、木漏れ日のような微笑と共にアンネローゼはその言葉をヒルダに託してくれた。あるいは自分は、アンネローゼからのその付託に応えようとしているのだろうか。あの時、アンネローゼはどんな意味を込めて、彼女の弟をヒルダに託すような言葉を口にしたのだろうか。いつ、いかなる問題に対しても明晰な回答を用意しているヒルダにしては珍しく、想いがぐるぐるとおなじ所を巡っているような気がして、容易なことでは答への道を見いだせなかった。ことが理性の支配する領域からはみ出していて、感情の左右する部分の揺れが大きすぎるようにヒルダには思われたのだ。

ヒルダは激しくかぶりを振った。短くした、くすんだ金髪が僅かに乱れて宙に踊った。ヒルダは気を取り直すように、掌で軽く頬をこすった。『恐るべき冬』を前にして、日々こなすべき膨大な量の職務が彼女を待っている。答えの出ない思いに、長くかかずらっている時間は彼女にはなかったのだ。

マリィンドルフ伯爵家が、国立オーディン文理大学医学部に対して『医学分野における未踏査研究』を称する研究テーマの公募を行ったのは帝国暦四八八年二月一日のことであり、パウアーシュミット医師による未確認の膠原病系疾病に関する研究を含めた一〇のテーマが伯爵家によって受理されたのはその約一ヶ月後の四八九年一月一〇日のことだった。

ゴールデンバウム王朝の時代であれば、大貴族が個々の家の名において行う事業に帝室や政府が口を挟むことはあり得なかった。まだ、皇帝の地位にあるのがエルウィン・ヨーゼフ二世であるという点で、ゴールデンバウム王朝時代がなお続いていると言えないこともなかったが、既に一切の実権がラインハルトの手に移っているこの時期、マリィンドルフ伯は典礼省……これも既にゴールデンバウム王朝の遺物でしかなかったが……を経て、宰相府への裁可を願っている。本来なら、国務尚書レベルでの裁可、それも国務省の担当部門責任者の許可で十分な内容ではあったのだが、当の国務尚書をマリィンドルフ伯自身が代行している以上、伯の生真面目さが帝国宰相の裁可を求めさせた。

ラインハルトがこの件に関して何らかの関心を示したり、ヒルダに内容を問うたりしたという記録は残されていない。実際、彼にとっては無数の裁決案件の内のささいな一件というに過ぎなかった。マリィンドルフ伯にとっても、公私の別を厳にする生真面目さを賞されようと、非難や批評をつけるべきいかなる材料ともあり得なかったはずである。この情報が内国安全保障局をも経由したと

いう、ただ一点を除いては。

性格的に陰険、虎の威を借る狐、ローエングラム体制で最初の奸臣。様々な悪評を一手に引き受けるかに見えるのが、この当時の内国安全保障局長ハイドリヒ・ラングであるが、彼を『無能』と罵倒する声だけではない。旧貴族の残党の勢力を掃滅し、帝国政府内に根強く残っていた門閥貴族やゴールデンバウム帝室の影響力を排除して、ローエングラム独裁体制を整える上でラングの果たした役割は決して小さなものではない。史家の中には、ラインハルトに仕え始めた当初は、確かに有能で忠実であり、旧勢力の排除と帝国の新生へ向けての熱意を共有し得ていたとして、彼を弁護する声も皆無ではない。

ただ、そうした史家でさえ、ラングの行動がある時期から微妙なずれを見せ始めたことだけは認めざるを得ない。

『『恐るべき冬』作戦発起が決定される前後から、明らかにラングの行動は、反ローエングラム勢力の一掃という、本来の彼の職務からは逸脱し始めていた』

それがいつの時期からだったかについては定説はないが、もし神の視点を持つ観察者が存在すれば、それはエルウィン・ヨーゼフ二世の誘拐事件から約二週間を経た、ある一日からだったと断じても知れない。

帝都、ローエングラム元帥府からそれほど遠からぬ、とある建物の一室。ハイドリヒ・ラングはそこにいた。

『伯爵夫人……』

地獄からの囁きにも似た、掠れてひび割れた声。

息を呑む声がこれに応える。恐怖よりも驚きが立ち勝ったかにも聞こえる、悲鳴ではあっても本来の音楽的な響きを失っていない女性の声とはつきりと分かる。

『——ジーク!』

一拍を置いてその声が室内の空気を震わせた時、血色の良い、丸々とした指が伸びて停止ボタンに触れる。日付と並んで、録音されたまさにその時間、まだ夜明けにすら十分の時間を余した時刻を、ねつい光を帯びた小さな目が食い入るように見詰める。

「ジーク……ジークフリード・キルヒアイス上級大将——」

ローエングラム公ラインハルトの姉、グリューネワルト伯爵夫人アンネローゼが、私的な立場ではキルヒアイスをそう呼んでいる事実が、ラングの秘密記録の中にファイルされてから久しい。録音の声紋分析もまた、この声がアンネローゼのものに間違いないことを裏付けており、さらにはこの一言が、極く至近にいるはずの人物へ呼びかけるものだったことも確定している。

通話が録音された日の前日、キルヒアイスは元帥府での会議途中で体調を崩して退席している。その彼が、その夜にアンネローゼの居室、あるいは寝室にいたことを、この通話記録は示して余りある。つまり、彼を無二の親友として信頼し、我が半身とまで呼んで重用するローエングラム公の姉と、キルヒアイスは情を通じていたことになるのだ。

元々、エルウィン・ヨーゼフ二世誘拐犯の手掛かりを得るための盗聴だったが、偶然のように誘拐犯がアンネローゼにかけてきた

個人通話の中に紛れていた、この一節。これを耳にした時、ラングの中で何かが変わったようだった。

「何が無私の忠臣なものか。やつも、あらゆる手を使ってのし上がるうとしてゐる野心家ではないか」

唯一の絶対者に語りかけるがとき荘重なバリトンのは、しかし、明らかな嫉視と憤りに歪み、本来の音階を外している。キルヒアイスですらそうなのだ。自分が陰謀と奸計の限りを尽くして、来るべきローエンングラム王朝における栄達を望んで何が悪いといふのか。

ラング自身にしてみれば、歪んでいるとかずれているとか言う自覚はなかった。彼の主観において、彼はあくまでローエンングラム体制確立のための職務に精励しているのであり、キルヒアスを初めとする元帥府幹部の公私にわたる情報収集もその一環に過ぎなかった。旧王朝時代、彼はそうやって謀反人や共和主義者の蠢動を事前に捉えて通報し、あるいは彼らを捕らえてきた。日常の些細な動きの中にこそ、叛意や陰謀の微かな臭気が漏れ出てくるものなのだから。

今回も同じことをしているに過ぎない……それがラングの主観ではあったが、そうした情報収集が、実在する陰謀をあぶり出すためではなく、無理矢理にでも『あり得る策謀』の存在を証明するためのものに、少しずつ変わり始めていたのである。ラング自身はあるいは気づいていなかったのか、気づいていてなお、彼の累進こそが、ローエンングラム体制の安定を意味するのだ——そう言う強引な論理の許で、やむを得ないこととして自らを納得させていたのかも知れない。

この通話記録は、キルヒアイス上級大将の、ローエンングラム公

への叛意を証明するものだ——ラングはいつの間にかそう確信するようになってゐる。キルヒアイスがローエンングラム体制の中で異論を許さぬナンバー2である以上、彼を排除せぬ限り、ラング自身が新王朝を牛耳り得る立場に就くことは叶わない。ラングの最大の支持者であるオーベルシュタイン参謀長……これは彼の勝手な思いこみに過ぎなかっただろうが……のナンバー2不要論も、もはや妄想と言つしかない野心とが結びついた時、ラングは、その視野のすべてをキルヒアスの排除に向けた、正しくもなく、何の根拠もない情熱に占めさせてしまったのである。

『この録音を直ちに公表するのは得策ではありませんまい』

室内に新たな声が響く。強靱な意志を秘めた男性的な声は、しかし変調されて所有者を明らかにしてはいない。

もっとも、通信の相手がフェザーン自治領主府で枢要な地位を占める人物であることを、ラングは知っている。キルヒアスを初めとして、キルヒアイス以外で言えばロイエンタール、ミッターマイヤー、ビットンフェルトら、ラングを『薄汚いどぶ漁りの小役人』として蔑視するいわゆる武断派の提督たちに対抗して勢力を確保する必要上、ラングはあらゆるつてを求めざるを得なかった。

その中で、帝国軍技術総監シャフト大将とのコンタクトは、ラングに思わぬコネクションをもたらした。リップシュタット後、巧みな遊泳術を駆使してローエンングラム体制に加わったシャフトだが、シャフト自身がラインハルトの好意を勝ち得ている全き自信を欠いていた。

宇宙要塞の恒星系間移動という新技術の提案、さらに機動要塞建造への強引な動き。それら全てが、シャフトの焦りであり、何と

かローエングラム体制の中で確固とした地歩を得たいとする願望の裏返しだったといえる。ガイエスブルグ要塞の改装が行われ、その実証実験も成功したことで、シャフトの願望も満足を見たかに見えた。

シャフトがやり過ぎたとすれば、実証実験成功の祝賀の席で、必要以上に我が功績を誇り、ガイエスブルグによる即時の同盟領侵犯を主張しすぎたことだろう。

「これは大神オホイミの与えたもつた千載一遇の好機と言つべきであります。これを活かせぬとあれば、これはもはや不作為の罪を自ら進んで犯すの愚と称すべきです」

ラインハルトにしてみれば、確かに恒星系間航行能力を持つ要塞は巨大な戦力となり得る。その意味でシャフトの功を認め、賞するにやぶさかではないが、実際に要塞を改装し、運用するのは別話である。また、要塞の改装だけでも優に半個制式艦隊の整備に要するほどの費用を要するのだ。何もかもが自らの功績であるかのようになり返っているシャフトの態度は、ラインハルトにしてみれば笑止の極みであり、反論が必要以上の辛辣さを帯びていたのも当然だった。

「つまり、卿が大神オホイミであり、わたしに絶好の機会を下し賜った、卿はそう主張するのだな」

ラインハルトは今少し、下僚に対する言葉を吟味すべきであった——この時のシャフトへの態度を批判し、ラインハルトの「若さ」を論難する声が少くないのも事実である。

『シャフト大将に浴びせた一言について、ローエングラム公にまっ

たくの責なしと主張するわけではない。ローエングラム公はシャフトという人物の自我を余りにも直截に貫きすぎたと言つべきである。シャフトをしてあくまで自陣営に忠節を尽くせしめるには、公が政治家でなさ過ぎたとの非難が全き不当であるとするには無理がある』

芸術家提督として知られるエルネスト・メックリンガーは手記にそう記している。

『しかし、同時に、公の麾下にあつてゆえなき肅清への恐れを抱いた者は、今少し、公の為人を見るべきだった。彼らは、ローエングラム公の治世と、功ゆえに罪せられた旧王朝とを等しひとし並に見る過ちを犯した。翻つて言えば、それこそが彼らの罪だったのである』

メックリンガーの批評の当否はともかく、シャフトはラインハルトによる肅清から身を守るべく、ラングの接近を許した。ラインハルトが、ごく一部の側近のみを信頼し、他の下僚たちを使い捨てる駒として扱っているのではないか。いずれ、公の覇業が完成し、自分たちが用済みになれば容赦なく肅清されるのではないか——ラングの言説は、シャフトの抱いていた危機感と見事なまでに一致していた。

「ゆえに万一の場合に備えて、吾々は横のつながりを強めておく必要があるではありませんか」

ラングの言葉に、シャフトが魅入られたように頷いた所以である。

こうしてシャフトは、内国安全保障局を経由する帝国内外のあらゆる情報、ローエングラム元帥府の諸提督の公私にわたる動向を入手するルートを手に入れた。そして、その一方でラングは、シャ

フトが密かに維持し続けていた、私的な資金の調達ルートを知ることになった。技術総監部の資材および技術調達に伴う、フェザンとのつながりである。

「そ、それは私と分かつている。ただ、通話を監視していたというだけで、ローエングラム公には大変な不興を被ったのだ」

『グリューネワルト伯爵夫人とキルヒアイス提督は、ローエングラム公にとっては特別の存在なのです。そのことを忘れぬようになることだ。徒にことを急げば、断罪の刃はあなたに降りかかってくるでしょう。時間が必要です。そして、ローエングラム公とキルヒアイス提督の間に距離を置かせることです。どれほど信頼する相手でも、長い時間、すぐには会えぬ距離を隔てていれば、不信の種が芽を吹くだけの余地も生まれるというものですぞ』

「そんなことは言われなくとも分かっている。ただ、これだけの明らかな叛意の証を、このまま埋もれさせてしまつのが余りに惜しいと言っているだけだ」

『捨てるには及びますまい。この情報もまた、公とキルヒアイス提督の間に隙を穿つための手だてとして使える。要はタイミングと、使う場所を誤らなければ宜しい。預からせていただければ、カードは私の方で切らせていただくが――？』

声は、あるいはラングの焦りを抑えようとする響きを含んでいたかも知れないが、ラングは気づかなかつた。

「卿に良い策があるなら、使つがよい。ただ、私にまで累が及ぶようなまねだけはご免被るぞ」

『それはお任せあれ——で、新たな情報を入手されたと聞いたが？』

「ああ」

尊大に頷き、ラングは一通の書類をコンソールに表示する。マリンドルフ伯爵家による、医学分野での研究テーマ公募の許可申請書である。

『これが……何か？ 帝国ではこれまで色々と差し障りがあるがゆえに研究の進まぬ分野があったのは事実。ローエングラム公支配下になって、そうした障りも取り除かれた。今後、こうした分野の研究は伸びるだろうし、基礎的な研究に資金を投入するのは中々に目端の利いた判断だと思われるが、閣下には何かご不満でもおありか？』

「問題は、このパウアーシュミットとか言つ、文理大学の准教授だ。調べさせたが、これは大して目のある研究ではなさそうだったのだ。なせ、マリンドルフ伯爵家がこんな研究に私費を投じるのだ。卿のところでは何か分かんのか？」

『はて——』

声は、こんどははつきりとした嗤いを含んだ。気づいたラングの表情がみるみる険しくなる。

『基礎的な研究と申し上げた。一〇投資して一当たれば大変な投資対効果だと心得られるが宜しかろう……ただ、左様ですな。強いて言えば、マリンドルフ伯は現在の国務尚書を代行しておられる。さらにマリンドルフ伯爵令嬢は、ローエングラム公の最も信頼される側近の一人だ。宰相首席補佐官と帝国軍幕僚総監代理を兼務する。よほどの才があり、公の信頼が厚くなければ、わずか二一歳の女性の身でこれほどの地位に就くことはあり得まいと思われませんか——』

マリンドルフ伯爵令嬢ヒルデガルトに較べて、お前の地位はどうなのだ。ローエングラム公からの信頼はあるのか……言外に含ませた響きが、真つ直ぐにラングの胸を貫いたかにさえ見えた。栄養に満ち足りた赤ん坊めいたラングの顔貌にどす黒い血の気が上り、醜怪な翳りとなって童顔を隈取った。

「よ、余計なことを言つな！」

『これは失礼した。私の言いたいのは、これだけの重用を受けているマリンドルフ伯爵一族であつてみれば、何か表に現れぬ情報を握つた上で、こつした投資と言つか、事業に手を染めた、とも考えられますな』

「表に現れぬ情報だと？」

ラングの表情から一瞬に怒りが拭い去られる。通話相手のフリーズが、内国安全保障局長としてラングの神経に触れる、何かしらを含んでいたのだ。

やややつて、ラングは顔を上げる。その表情が、油断して餌を貪っているネズミを見つけた猫、それも満腹しているが退屈している猫の表情に変わつていた。罪を見つけたのではなく、罪を着せ得る相手を見出した時の治安担当者の顔と言つても良い。

「卿が言いたいのは、伯爵家は、帝国政府、いやローエングラム公のご計画を密かに先取りして、先行者の利益をかつさらおうとしている。そういう可能性があると云つことだな」

『そのような解釈も可能だと申し上げた。当否はあなたがお調べになるが宜しかろつ』

ラングの、半ば首に埋まった頭^{おたま}が、慌ただしく上下に動く。

何のことはない。相手は、マリンドルフ伯爵家の研究公算が、い

わゆる『インサイダー取引』にあたると示唆したに過ぎない。旧王朝であれば、政府・帝室の事業情報を門閥貴族が我が物顔に利用し、法外な利益や利権を獲得することなど日常茶飯事的に行われてきたことだった。

だが、旧王朝はともかく、現ローエングラム体制、ひいては極く近い将来の新王朝においては、これは弾劾されるべき犯罪となるに違いない。いや、旧王朝から民心が離れた一因こそ、門閥貴族によるこつした国家なり、国家の費用の私物化だったではないか。

ラングは巧みに先導されている自分に気づいていない。相手が、マリンドルフ伯やヒルダを指して、『ローエングラム公の側近』と評した結果、ラングは彼らもまた蹴落とすべき競争相手として認識することになったのだから。

「無論だ。調べは私がやる。取りあえず良いことを教えてくれた、感謝しておく」

『お役に立てて、光栄の極みです、閣下』

ことさらに恭しく声を低めてみせるが、変調された声では効果も半減するといったところだ。知つてか知らずか、通話相手は話題を変える。

『ところで、キルヒアイス提督の動向について、何か情報をお持ちかな？』

「キルヒアイス提督なら、当初の予定通りにイゼルローン方面へ赴いたと聞いた。特に新たな情報はない」

『しかし、キルヒアイス提督は同盟への和平提案を行う計画も合わせお持ちだと聞いているが、その点はいかがかな？』

「ああ、確かに和平提案を持ちかけるとは聞いているが、あんなも

のは上手くいくはずはない。要塞を含めてイゼルローン回廊を非武装化し、要塞を境界点として軍事活動を凍結する。西国は回廊両側に両国は武装要塞を配置できる……など、論外ではないか。その上に、回廊出口宙域に限って両国間の通商を可能にし、そのための通貨レートを決定する機関を設ける……これでは、まるで帝国が叛徒どもに膝を屈して和を請うているようなものではないか。この一事をとつても、キルヒアイス提督を売国の徒として告発するに十分ではないかと私は考えているほどだ」

ラインハルトは無論のこと、彼を内国安全保障局長に推したオーベルシュタインですら、ラングのこの応答を耳にすれば、彼を要職につけたことを深刻に後悔すべきだったに違いない。キルヒアイスによる対同盟和平折衝は、いまだ帝国政府・軍部双方に於いて最高の機密事項であり、一介の局長が、誰とも知れぬ相手に気軽に告げて良い内容ではなかった。

帝国を現在の安定に導き、あまつさえ対フェザン侵攻作戦である『^{フリン・フリン・フリン}恐るべき冬』発起を可能にした功績の一端は彼に帰すべきものである。である以上、『^{フリン・フリン・フリン}恐るべき冬』作戦に関わる情報開示の要否の判断を自ら行って何が悪い。ラングにしてみれば、正当極まる論理に違いなかったが、翻つて言えば、ラング以外には通用しない論理であり、これまで彼が多くくの政府官僚、貴族、帝国軍士官たちを断罪してきた同じ罪名……対敵通牒罪を以て、彼自身が裁かれたとしても意義の申し立てようもない。そつした客観的な視点は、すでにこの時期のラングからは縁遠いものとなっていたのである。『ほう、キルヒアイス提督が既に、そんな折衝を開始されている

と……?』

変調された音声を通じてさえ、通話相手が深甚なる興味をこの話題に示していることに、しかし、ラングは気づかない。

「ああ、すでにイゼルローン方面へ向かつて帝都を發っている筈だ……これで十分か?」

「十分です。閣下には引き続き、閣下のシンパを増やすべくお骨折りを頂きたい。我らとしても可能な限りのご助力はさせていただきます」

「ああ、期待はさせてもらつて。私としても、卿らに情報を提供する上では、危険すぎる橋を渡っているのだから」

「やはり、帝国は和戦両略を採るつもりなのだな」

フェザン自治領主府。ケッセルリンクのもたらした報告書を目にしたならば、ラングは目を剥いただろう。『^{フロスト}霜』、『^{シュネー}雪』、そして『^{シトールメン}嵐』。三個軍団からなる帝国軍がすでに動き出していること。その中で、帝国軍の一部が和平提案のためにイゼルローン回廊に向かったことなど、本来なら帝国軍の最高機密たるべき内容が、細部には不正確さは残すものの、概略においては概ね正確に記載されていたのだから。

「イゼルローン要塞を境界とする軍事行動の凍結および、回廊宙域内の非武装化と回廊を経由した両国辺境宙域間での通商の開始——か」

「要するには、帝国は同盟と手を結ぶ一方で、我がフェザンを併

呑しようとしていることになります。これはフェザーンにとって最悪のシナリオとなります」

最悪の……と言いつつ、ケッセルリンクの端正な表情が恐怖と緊張に青さめる様子はない。絶体絶命の窮地に陥った自治領主への嘲笑が抑えきれぬ目の色に浮かんでいるだけだった。

「帝国軍がフェザーンになだれ込んでから同盟に救援を要請しても間に合わないでしょう」

「同盟が動くわけではないな」

ルピンスキーは平然として切り捨てる。フェザーンへの膨大な負債を抱えて経済的には破綻状態にある同盟である。フェザーンが消滅して、帝国の一地方となってしまうえば、負債の返済も不要とばかりにフェザーンを見殺しにする。行動に原則性も何もない同盟政府である。これは可能性どころか必然性をもった予想だった。

「ここまででは概ね予想通りだな——あちらの方の進み具合はどうだ？」

「エルウィン・ヨーゼフ二世の受け入れと、亡命政府樹立についての折衝は最終段階に入っています。あと二週間もすれば同盟政府が制式に発表できる段階に至れるでしょう」

エルウィン・ヨーゼフ二世は、誘拐されて二週間余りその消息を断つて後、帝都で身柄を奪還された。それが、帝国政府の公式発表である。ローエングラム公ラインハルトは、エルウィン・ヨーゼフ二世が肉体的・精神的に不適切な状態にあると発表し、向こう一〇年間にわたって彼の治療と再教育を行うと発表。自らは正式に皇帝の代行者として摂政の地位に就く旨を表明している。

これに対して、帝国の一般市民の間ではエルウィン・ヨーゼフ

二世が帝都から脱出したため、ラインハルトが皇帝の替え玉を立てたのだとする噂が根強く囁かれている。一部には旧門閥貴族系勢力による懐旧の思いから発生した噂には違いなかったが、より積極的な勢力があるのも確かである。他ならぬフェザーンと、フェザーンと太い地下茎で結びついている、ある地下組織がそれだった。

フェザーン……ルピンスキーがそつした噂の広がりを出し続けた理由が、現在、同盟領ボレヌト星系に到着している『エルウィン・ヨーゼフ二世』だった。

真物のエルウィン・ヨーゼフ二世がなお帝都に留まり、ラインハルトの庇護と再教育を受ける境遇にある。その事実をルピンスキーは知っている。しかし、その事実を認め、皇帝の誘拐を断念してしまえば、残るのはフェザーンが皇帝の身に手をかけた、許されざる不敬の罪だけである。

要するに、同盟と帝国の間を決定的に離間し、全面的な戦争状態を再開させる。さもなければ、フェザーンは帝国からの半独立的地位を奪われて、その一地方星系に転落。一〇〇年をかけて築き上げてきた、帝国・同盟双方への経済的支配力も霧消してしまう。そして、フェザーンの没落は、そのままルピンスキーの生命の終焉を意味する。

そんな中、帝都からエルウィン・ヨーゼフ二世を伴い来たるはずだった亡命船『ロシナンテ』号から現れたのが、『エルウィン・ヨーゼフ二世』を名乗る少年だった。

この『エルウィン・ヨーゼフ二世』の出現が、帝都での皇帝誘拐事件を真に主導したある人物の、自身に当たった皮肉きわまりない

メッセージであることをルビンスキーはたちまち見抜いた。

『皇帝陛下の身柄を、あなたの身勝手極まりない策謀の道具に使わせることなど、絶対に許さない』

面識こそないが、鉄を截るような声が目の当たりに聞こえそうだった。

が、ルビンスキーは決断した。構うことはない。この『エルウィン・ヨーゼフ二世』とて、ゴールデンバウム王朝の血脈の幾ばくかは引き継いでいるに違いない。それに、即位してまだ三年に満たず、長く皇位継承者としては傍系に押しやられていた真物のエルウィン・ヨーゼフ二世の容貌や為人を詳しく知る人間など、旧門閥貴族にもほとんど存在しないのだ。まして、同盟が、この『皇帝』の真偽など判断できようはずもないではないか。

「しかし……あの『エルウィン・ヨーゼフ二世』がエルウィン・ヨーゼフ二世でない決定的な証拠があります。医学的な分析すら必要ありません」

当初、ケッセルリンクは危惧を呈したが、それでもこの『少年』をつかつて皇帝の亡命劇を演出する以外に、何らかの形でフェザーンがあるいはかつてはフェザーンだった何かしらを生き延びさせる手段がないことは認めざるを得なかった。いや、ケッセルリンクにしてみれば、そうした大混乱こそが、かねてからの彼の念願を叶える絶好の機会を提供するに違いなかったのだ。彼の上司であり、公式には認められない彼の父親であり、地球教という過去の亡霊の代理者を蹴落として、その地位に取って代わるという。

互いに相反する目的の下、ルビンスキーはケッセルリンクの協力を得て、同盟政府の最高評議会議長ヨフ・トリューニヒトの同意

を確保して、『エルウィン・ヨーゼフ二世』の亡命を進めさせることに成功した。

「例の件は知られてはいまいな？」

「はい。レムシャイド伯も、あれが皇帝だと信じ切っています」

年齢や顔立ちはエルウィン・ヨーゼフ二世に酷似している。ルビンスキーが密かに遺伝子判定をさせた結果では、確かにゴールデンバウム王朝の血を引いた子供である。そして、この『エルウィン・ヨーゼフ二世』は、かなり人見知りが激しいものの、受け答えの明瞭さは聡明さを伺わせる上に、真物の皇帝にはない子供らしい無邪気さという魅力も持っていた。

『エルウィン・ヨーゼフ二世』は、はじめて対面したレムシャイド伯に、自ら『レムシャイド伯が、色々と苦勞をかけて済まないと思う。これからもよろしく頼むぞ』と声をかけ、伯を感激の淵に突き落としてみせたのだ。

「油断するな。あの子供はバカではないぞ。それに、矛盾するようだが子供は気まぐれなものだ」

「分かっております。レムシャイド伯ですら、あの子供のプライベートには立ち入れないことになっていますし、伯もそれを不自然には思っています」

皇帝の身の回りの世話は、ケッセルリンク自身の部下から二名を選び、下級の亡命貴族の娘を名乗らせている。当然のことだが、その名の真の所有者はすでにこの世の人ではない。

「あと三年もすれば隠しおおせるものではなくなくなるとおもいます——別に、それまで持つ必要もありますまいから」

そして、この『エルウィン・ヨーゼフ二世』を擁した、レムシャ

イド伯ヨッフェンを首班とした亡命貴族のグループは同盟に入り、亡命政府樹立を間近に控えている。

そんな中で、帝国が同盟に対して和平の提案を申し入れてきたら、フェザーンの一切の企図は瓦解するのではないか——ルピンスキーが案じるのはその点だった。

「……それで、この帝国からの和平交渉はいかがいたしましたでしょうか」

「やはりキルヒアイス上級大将か？」

「さようです。『バルバロッサ』はすでにイゼルローン回廊に向かっていきます。ここ半月の内に、イゼルローン要塞に対してコンタクトするでしょう。自由惑星同盟がそつそつ簡単に和平を受け入れるとは思えません。連中に見れば、帝国打倒が国是ですし、今の政権も一応は対帝国強硬姿勢で国内の人気を集めているわけですから」

「それはそつだ。その点で異論があるわけではないぞ、補佐官」

気になるとすれば、軍事活動の凍結と限定的な通商の許容というのは気になる条件だ。これではまるでイゼルローン要塞とその後背宙域を同盟から切り離し、帝国に友好的な半独立宙域の成立を狙っているようではないか……考えルピンスキーの表情が僅かに強ばった。その通りなのかも知れない。キルヒアイス提督が狙っているのは、同盟との全面的な和平ではなく、同盟の分裂ではないのか。さらに穿って言えば、あの赤毛の名将は、同盟政府が易々として和平に応じるとは考えておらず、むしろヤン・ウェンリーに対して同盟からの分離独立と、帝国・同盟間の和平仲介を要請するつもりなのではないだろうか。

ヤン・ウェンリーは優れた用兵者だが、政治を忌避していると聞く。キルヒアイスからの提案に乗って、要塞と、たとえば彼とは浅からぬ縁のあるエル・ファシルなどと連携して独立政府を樹立するなどという政治的行動に出るとは思われない。だが、そうであったとしても可能性はゼロではない。ジークフリード・キルヒアイスがヤン・ウェンリーと直接対面して、両国の恒久的和平のステップとしてどうしても必要だと説けばヤンが考え方を変えないという保証はあるだろうか。

「わたしが望んでいるのは、この先ただか数十年の戦いのない世界なんだ」

かつて、ヤン・ウェンリーは部下に向かってそつそつと言ったと言っているではないか。

「戦いにかかっているのは、たかが国家の存亡だ。気楽に戦ってくれ」

ある戦いに際しては、そうも言ったと聞く。ヤン・ウェンリーが自由惑星同盟という政治組織ではなく、組織を構成する市民の存在に重きを置く考え方をするのであれば、あるいは国家組織である自由惑星同盟の存続に拘らずとも良い……そつ考えることも不可能ではない。

「補佐官……ご苦労だが、もう一度、同盟の弁務官殿に会ってきてくれ」

「は。自治領主の命令とあれば何度でも。用件は何でありましようか？」

「うむ」

頷き、ルピンスキーは正面からケッセルリンクの、色の薄い瞳

を見つめた。

「ヤン・ウェンリーの件だ」